

国語

(時間 五十分)

受験番号

【注意事項】

- 1、試験開始の合図があるまで、問題冊子の中を開いて見 はいけません。
- 2、指示があったら、解答用紙を問題冊子から取り出し、解答用紙の決められた欄に配られたシールをはりなさい。はり終わったら、解答用紙をすみやかに問題冊子の中に戻しなさい。
- 3、試験開始の後、受験番号を問題冊子・解答用紙の決められた欄に、氏名を解答用紙の決められた欄に、それぞれ記入しなさい。
- 4、問題文には、原文(原作)の一部を省略したり、文字づかいや送りがないを改めたりしたところがあります。
- 5、答えは解答用紙の決められた箇所かしよに記入しなさい。
- 6、問題は十七ページあります。問題が抜けている場合、印刷がはっきりしない場合は申し出なさい。
- 7、何か用事ができたときは、だまって手をあげなさい。ただし問題の内容についての質問をしてはいけません。
- 8、試験終了の合図しあつごうがあったら答えを書き続けてはいけません。すぐに筆記用具を置いて解答用紙の回収を待ちなさい。
- 9、問題冊子は持ち帰ってかまいません。

次の——線部①～⑧のカタカナの部分を漢字で、⑨・⑩の漢字の部分をひらがなで書きなさい。いずれも一画一画をていねいに書くこと。

日本代表の^①コウホに選ばれる。

食べ物をびんに詰めて^②ミツペイする。

土地を^③タイシヤクする。

議会の解散は^④ヒツシンの情勢だ。

食堂の^⑤エイセイ管理を徹底^{てつてい}する。

さまざまな動物の^⑥マネをする。

物語の今後の^⑦テンカイを予想する。

この事故で^⑧ソンガイをこうむった。

将来は^⑨分別のある大人になりたい。

美術品の鑑定^{かんてい}では目が^⑩利く。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

明日花が本好きになったのは、祖母のスエの影響だ。

まだ、自分で本を読むことができない幼い時分から、スエはたくさん絵本を明日花に読み聞かせてくれた。

これ、好きだったな……。

本棚の一冊に、明日花は眼を留めた。

『ほたるとつきみそう』

大判の表紙には、月見草の葉にとまった蛍の様子、淡い水彩画で描かれている。明日花はその絵本を開いてみた。

むかし、ほたるはひからないむしでした。

まっくらなほたるは、おひさまのひかりにきらきらとかがやく、てんとうむしやこがねむしのことを、いつもうらやんでいました……。

ページをめくると、穏やかな祖母の声が聞こえてきそうだ。

内容を **A** ほど、繰り返して、何度も何度も読んでもらった。

ただの黒い虫の蛍は、色鮮やかなてんとう虫や黄金虫や蝶を羨み、なんとかして彼らのようになると黒い身体に色を塗ったりするが、ことごとくうまくいかずに却って笑いのものになってしまう。すつかり **B** 沈んだ蛍は、昼ではなく、夜に生きようと決意する。

そして、誰にも知られず、ひっそりと夜に咲く月見草と出会うのだ。

祖母のスエは、絵本を読むのがうまかった。ときには声色を変えながら、分かりやすく、臨場感たっぷりに、物語を聞かせてくれた。

いつしか月見草に恋をしてしまう蛍の話に、明日花は毎回 **C** 聞き入った。

祖母もこの本が好きだったらしく、同じ著者による本が、本棚にはいくつもあつた。どの物語も、登場人物が生き生きとしていて、わくわくする楽しさに満ちていた。

(中略)

「明日花」

階下から声が響き、ほんやり絵本を眺めていた明日花はびっくりとする。

「私たちも夕飯にするから、早く下りてきて」

「私たちが喉元まで込み上げた。この歳になって母に夕食を作ってもらうことも気詰まりだが、二人きりで食卓を囲むことを思うと、一層胸の奥が重くなる。」

「明日花、聞こえてる?」

「今、いく」

待子の声に陰しさが増すのを遮るように、明日花は返事をした。

『ほたるとつきみそう』の絵本を棚に戻し、部屋を出る。階段を下りて居間に入ると、待子がテーブル

ルに夕飯のおかずを並べていた。

(中略)

▼鶏ハムとパプリカのサラダ、キャベツとジャガイモの味噌汁、鯖の煮つけ……。

旬の食材を使った、手の込んだ献立だ。十代の頃は味気なく感じた母の料理は、三十近い年齢になると、成程、理にかなっているように思われた。きちんと出汁を取った味噌汁は余計な塩分が少なく、玄米入りの五穀米は少量でも腹持ちがいい。旬の鯖や、自家製の鶏ハムを添えたカラフルなサラダも洒落ていて美味しそうだ。

「いただきます」

テーブルを挟んで向かい合い、手を合わせる。

その後は、会話もないまま、互いに黙々と料理を口に運んだ。母が嫌がるので、食事中はテレビをつけることもできない。

「最近、いつも早いよね」

ふいに声をかけられ、明日花は一瞬、鯖の咀嚼を中断する。

「前は残業続きだったのに」

味噌汁のお椀と箸を持った待子が返事を待っている様子だったので、明日花は鯖を呑み込んで口を開いた。

「ちよっと、この春から、新しい仕事に就くことになったんだよね」

「新しい仕事？」

「うん、たいした仕事じゃないけど」

何気なくそう言うと、母の眉間に微かなしわが寄った。

「たいした仕事じゃないって、どういうこと？」

「どういうって……」

追及されるとは思わなかったので、暫し口ごもる。

「会社の創立百年企画の広報って感じかな」

「それなら、たいした仕事じゃないの」

「どうかな？ ほかにやる人がいないから、押しつけられただけみたいだけど」

決めつけるように返されて、明日花は首を傾げた。

「別に、やりたいことでもないし」

そう呟いた瞬間、待子が箸を置いた。

「そんなの当たり前じゃない」

「えっ？」

驚いて顔を上げると、待子が厳しい眼差しでこちらを見ている。

「会社の仕事なんて、やりたいことばかりのわけないでしょう。求められたことをするのが社会人の務めだと、お母さんは思うけれど」

「だから、ちゃんとやってるけど」

「だったら、たいした仕事じゃないなんて、軽々しく口にするもんじゃないでしょう。大体、それを決めるのは、あなたではないから。いい気になるのもいい加減にしなさい」▲

(中略)

「お母さん、私の仕事のことなんて、知らないでしょう?」

「知らなかったって、こちらは社会人経験が長いんだから、ある程度は分かるよ。大体、あなたは昔からおばあちゃんに甘やかされて育ってるから、自己中心的なところがあるし。調子に乗って、会社でも好き勝手なことやってるんじゃないかって、ときどき心配になる」

待子が苦々しい表情を浮かべる。

「おばあちゃんは、自分つてものがなくて、なんでも他人の言いなりになっちゃう人だし。あなたはそれが分かってて、我儘放題だったし」

まただ。

① この人はいつも、なにかと口実を見つけては、自分と祖母を否定しようとする。

なんにも知らないくせに。

祖母が毎晩臨場感たつぷりに読み聞かせてくれた絵本が、母にも父にも顧みられなかった幼少期の自分の心をどれだけ慰めてくれたか。

祖母の影響で本が好きになった自分が出版社に新卒入社することが決まったとき、祖母がどれだけ喜んでくれたか。

(中略)

二階の自室に戻る前に、明日花は祖母の部屋を覗いてみた。介護ベッドで、スエは目蓋を閉じ、小さくなって眠っている。

「おやすみ、おばあちゃん」

そっと声をかけ、明日花は半開きになっていた扉を静かに閉めた。

明日花は勤務先の出版社で「学年誌児童出版局」に所属しているが、以前関わっていたファッショ誌を担当する里子とけんかをしてしまい、仲裁に入った同僚の誉田康介に相談する。

「……ねえ、私って、そんなに自己中心的なのかな」

自分を責める里子の様子に、母の待子の姿が重なり、いたたまれなくなる。

「なにかあったのかは知らないけど、いくら遠慮のない同期でも、会社の受付前で喧嘩をするのはどうかと思うよ」

そう言われると、面目がない。明日花はすっかり **B** 沈して、視線を伏せた。

「俺は別に、市橋さんを自己中心的だと思ったことは一度もないけど」

黙り込んだ明日花を前に、康介は淡々と続ける。

「ただ、ファッショ誌局に早く戻りたいんだらうなどは感じるよ」

康介のいる学年誌児童出版局を否定しているようで、^② 明日花は更に申し訳なくなった。

「まあ、分かるよ。俺だって『学びの一年生』に配属された当初は、正直ショックだったもの」

注2 『学びの一年生』は康介が編集を担当している小学一年生向けの雑誌。

小学生ユーチューバーと、付録作りをしていた康介の姿が浮かぶ。だが、小学生ユーチューバーをサポートしながら、プログラミング・ミニカーを組み立てていた康介の笑顔に、嘘はないように見受けられた。

「誉田さんは、どうやって折り合いつけたの？」

正直に口にしてしまい、明日花は一瞬「しまった」と思う。これではまるで、Dみたいだ。だが、康介は別段意に介した様子もなく首を傾げた。

「折り合いついていうより、やってみたら結構興味深かったっていうほうが大きいかな」

「興味深い……」

「そうだね」

康介が頷く。

「編集していくうちに分かったんだけど、学年誌っていうのは、その歳の子どもであれば、オールカマーなんだよ。誰でも参加できるっていうか、属性を問わないっていうか。まず、少年雑誌や少女雑誌みたいな、男子、女子の区別がないでしょう？ それと、対象が小学生だから、当然理系文系の区別もない。学習ページのほかに、漫画や流行りのアニメ情報も載っている。ちよつとしたゲームやパズルのページもある」

一呼吸ついて、康介は正面から明日花を見た。

「要するに、間口がものすごく広いんだ。どんな子どもでも、どこかしらに心惹かれるページを見つけれられるんじゃないかって思うし、そうであってほしいという気持ちで編集してる」

康介の率直な言葉は、明日花の胸にもストレートに響く。

「『学びの一年生』は読者参加のページが多いから、実際、たくさんのお小学生たちと会う機会があるんだけど、子どもって③いうのは、小さな人だなんてつくづく思うようになったしね」

「小さな人？」

「うん」

少し眉を寄せながら、康介はコーヒーを啜った。

「子どもって一口に言うけど、彼らや彼女たちは、既に全部持つてるんだ。今の俺たちにつながるもの、全部」

「それって、個性とか才能とかのこと？」

明日花が尋ねると「うーん」と、首をひねる。

「多分、もっと、根本的なもの。恥とか、誇りとか、そういう感情が、子どものうちから全部備わってる。個性や得手不得手は、そこから引き出されるっていうか……。なんか、うまく説明できないけど」

暫し口ごもった後、康介は続けた。

「とにかく、彼ら彼女らは、ものすごく貪欲に色々なことを試したり、挑戦したりしながら、自分で

注3 プログラミング・ミニカー以前、小学生ユーチューバーがプログラミング・ミニカーを組み立てる企画があった際に、康介がサポート

したことがあった。

注4 オールカマーここでは「誰でも受け入れる」という意味。

自分を引き出そうとしている感じがするんだ。子どものときのことなんて普段は完全に忘れてるけど、小一の子たちを間近に見ていると、ああ、俺もあんなふうにはトライアンドエラーを繰り返して、恥をかいたり、誇りに思ったりしながら、今の俺になったのかなとか考えたりするよ」

コーヒーをテーブルの上に置いて、康介が腕を組む。

「間口の広い学年誌が、彼らや彼女らが自分を引き出す手助けやきっかけになれるなら、俺は本気で光栄なことだって思ってる」

その言葉を聞きながら、小学生チューバーと一緒にプログラミング・ミニカーを作っていた康介の笑顔に嘘がなかったわけを、明日花はようやく理解できた気がした。

(中略)

「誉田さん、ありがとう。^④ なんか、吹っ切れた」

一息にコーヒーを飲み干して立ち上がる。

「学年誌百年企画、私ももう少し本腰入れて、やってみる」

空になった紙コップを投げると、綺麗な放物線を描いてダストボックスに収まった。

「ストライク！」

康介の掛け声に、明日花は小さくガッツポーズする。

(古内一絵『百年の子』による)

問一

A · C に入る言葉としてもっとも適切なものを、次のア～エの中からそれぞれ

一つずつ選び、記号で答えなさい。

A ア たたみかける

イ あげつらう

ウ おもんばかり

エ そらんじる

C ア 胸を焦がしながら

イ 胸を躍らせながら

ウ 心をいためながら

エ 心をくだきながら

問二

B

にもっとも適切な漢字三字を入れ、解答欄の形に合わせて四字熟語を完成させなさい。

い。なお、

B

は二箇所あります。

問三

▼ ▲ではさまれた部分について、次の(Ⅰ)(Ⅱ)の問いに答えなさい。

(Ⅰ) ここでの「明日花」の様子に関する説明としてもっとも適切なものを、次のア～エの中から

一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「明日花」の何気ない言動にも「母」がいらだちを覚えてしまっているため、「明日花」なりに気をつかいながら対応しているが、うまくかみ合っていない。

イ 「明日花」の自己中心的な態度を不快に感じて厳しい言葉を投げかける「母」の言動を、「明日花」もうとましく感じてしまい、常に反抗的な態度を取っている。

ウ いい加減な「明日花」の言動を心配するあまり厳しく注意してしまう「母」の気持ちを、「明日花」も心の底では理解しているが、素直になることができていない。

エ 口数が少ない「明日花」の気持ちを聞くために、「母」が積極的に対話のきっかけを作っているが、「明日花」は「母」を恐れて距離を取りたいと感じている。

(II) ここでの「母」に関する描写びやうしやについての説明としてもっとも適切なものを、次のア、イ、ウの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「母」の手間ひまかけた食事のメニューからは、「明日花」に対する深い愛情が感じられ、一見厳しく思われる発言の中にも、理屈りくつでは説明できない親心の温かさが感じられる。

イ 「母」は「明日花」に対して、常に理不尽りふじんで感情的な言葉を投げかけているが、実はそうした感情の高まりが表情やしぐさには現れないように、大人らしい冷静さを保っている。

ウ 前半では「母」と呼ばれているが、後半で「待子」という呼び方に変わるのは、「明日花」と心を開いて話し合い、両者の距離感が縮まっていく状況じやうきやうと連動している。

エ 長い社会人経験をふまえた「母」の発言は、大人として筋が通ったものであるのだが、その合理性がかえって「明日花」の気持ちに寄り添よそうことを難しくしてしまっている。

問四

——線部①「なんにも知らないくせに」とありますが、「明日花」は「母」に対して、どのようなことを不満に感じているのか、**四十字以上五十字以内**で説明しなさい（句読点、記号も一字に数えます）。

問五

——線部②「明日花は更に申し訳なくなつた」とありますが、「明日花」はどのようなことを申し訳なく思っているのですか。その説明としてもっとも適切なものを、次のア、イ、ウの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ファッション誌局に異動したいという願望をつい口走ってしまい、康介の所属する学年誌児童出版局の雰囲気を批判してしまつたこと。

イ 自己中心的な性格をいつまでも直すことができず、里子と喧嘩した理由を素直に康介に知らせなかつたために心配をかけてしまつたこと。

ウ 会社の受付前で大人げなく喧嘩をしまつたうえに、不用意な発言で康介の仕事を軽かろんじているように感じさせてしまつたこと。

エ 康介からの声かけにうまく返答できず、視線を伏せて黙り込んでしまい、結果的に康介の優しい気づかいに応えられなかつたこと。

問六

D

えなさい。

に入れる表現としてもっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答

ア 康介の妥協を前提にしている

イ 康介に疑いの目を向けている

ウ 明日花が本当に自己中心的な人間である

エ 明日花が自暴自棄になっている

問七

——線部③「子どもってというのは、小さな人だな」とありますが、どういふことですか。その説明としてもっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 子どもは大人よりも生きてきた年数が短いので経験が浅いが、大人とは違って余計な先入観にとらわれず、様々なことに心惹かれて挑戦できる純粋な存在であるということ。

イ 子どもは生まれたときから様々な感情を持ち、大人に引けを取らないほどすばらしい個性や才能にあふれており、一人前の人間としてすでに完成された存在であるということ。

ウ 子どもは幼いながらも大人と同様の感情を備えており、様々な試行錯誤を重ね、多くの経験を積んでいくという点で、成長後の大人と本質的に変わらない存在であるということ。

エ 子どもは恥や誇りなどといった様々な感情から個性や得手不得手を引き出すことができる一方で、人生経験が浅いため、一人前の人間としてはまだ未熟な存在であること。

問八

——線部④「なんか、吹っ切れた」とありますが、「明日花」がこのような気持ちになることができたのは、仕事に対する「康介」のどのような姿勢に影響されたからですか。二十字以上三十字以内で説明しなさい（句読点、記号も一字に数えます）。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

人生で「これだけは失いたくない」という大切なものが、誰でもあるだろう。

愛する人がいれば、失いたくないだろう。打ち込んでいる仕事があれば、失いたくないだろう。宝物も持っていたら、失いたくないだろう。

そんなたいそうなものは何もないという人でも、たとえば、手や足を失えば、それがどんなに自分にとって失いたくないものだったか、気づかされてしまうだろう。ピアノやヴァイオリンを弾いている人だったり、ランナーだったりすれば、なおさらだ。

「お願いですから、これだけは自分から奪わなさい！」と、神に祈りたくなるものが、誰にでもあるものだ。

それを人生の最後まで失わずにすむこともある。とても素晴らしいことだ。しかし、人生の途中でそれを失ってしまうこともある。問題はそういうときだ。失うことができないものを失ってしまったとき、いったいどうしたらいいのか？

注1 フランツ・カフカに、人形と少女と手紙にまつわる有名なエピソードがある。
あらましは、こんなお話だ。

ある日、カフカが恋人のドーラといっしょに公園を散歩していると、ひとりの少女が人形をなくして泣いていました。カフカは少女に声をかけます。「お人形はね、

A

次の日からカフカは、人形が旅先から送ってくる手紙を書いて、毎日、少女に渡しました。当時のカフカはもう病状が重くなってきていて、残された時間は一年もありませんでした。

しかし、ドーラによると、小説を書くのと同じ真剣さで、カフカは手紙を書いていたそうです。人形は旅先でさまざまな冒険をします。手紙は三週間続きました。どういう結末にするか、カフカはかなり悩んだようです。人形は成長し、いろんな人たちと出会い、ついに

B

少女はもう人形と会えないことを受け入れました。

『絶望名人カフカ×希望名人ゲーテ 文豪の名言対決』草思社文庫

これは私が書いたものだが、元になっているのは、カフカの恋人のドーラの証言だ。『回想のなかのカフカ 三十七人の証言』という本に載っている。邦訳も出ている（吉田仙太郎訳、平凡社）。

これを読んで、「あれ？ 自分が知っている話と少しちがうぞ？」と思った人もいるだろう。そう、このエピソードは、少し変化したかたちで広く伝わっている。

まあ、有名人のエピソードというのは、たいがいそんなものだ。口から口、人から人に伝わっていくうちに変化していく。面白くなっていくことも多いし、その人物の本質をより伝えるものになっていくことも少なくない。

注1 フランツ・カフカ／現在のチェコ出身の小説家（一八八三～一九二四）。

注2 邦訳／日本語訳。

たとえば、江戸時代に池大雅という画家がいて、この人が描いた龍が、絵を抜け出して、家の天井を突き破って天に昇ったという有名なエピソードがある。

これは実際には、龍の絵を描いたら、大きすぎて、家から出せなくなってしまって、天井の一部を破って、そこから出したのだそう。

でも、龍が天井を突き破ったという話のほうで、「池大雅は、描いた龍が絵を抜け出したと噂されるほどの絵の名人であった」ということを伝えてくれている。事実のほうは、絵描きだったということしかわからない。① 事実よりも、変化した話のほうで、より真実を伝えているとも言える。

だから、「伝わっている有名なエピソードは、事実とはちがう！」と目 **C** を立てることは——研究者の人にとってはもちろん大切なことだが——一般人にとってはあまり意味のないことだと、私は思っている。

▼だが、このカフカのエピソードに関しては、ちょっと残念だなと思っている。なぜなら、変化したもののより、元の事実のほうで、いいからだ。少なくとも私はそう思う。

どう変化したのかというと、一般的に広まっているエピソードでは、最後にカフカが別の人形を渡したことになる。冒険の旅から戻って来たとして。そして、少女が「私の人形とはちがう」と言う、「旅をしているあいだに、少し変わったんだよ」と説明したことになっている。

「なんだ、それだけのちがいか」と思うかもしれない。

でも、私はこれは決定的なちがいだと思うのだ。

少女にとって人形は生きていくために欠かせないものだった——と言うと、大げさに感じられるかもしれないが、子どもにとってはそういうこともあるし、少なくとも、少女の世界の大切な一部だったはずだ。だから、泣いていた。人形をなくしたことで、少女の世界には欠落が生じ、それが少女の世界全体をゆるがせた。大黒柱がゆれだした家には住んでいられないように、そんな人生を生きていくことは難しい。人形をなくしたということは、少女にとって、現実を受け入れられなくなったということだ。

カフカはそのことを感じたのだろう。自分自身がすぐに世界がゆらいでしまう人だったから。世界がゆらいだとき、どうしたらいいのか？

大きな助けとなってくれるのが、文学だ。人は誰でも物語を生きている。世界がゆらくということ、は、これまでの物語では生きていけなくなったということだ。新しい物語が必要なのだ。それを作らなければならぬ。そのためには、まずは他の物語を読むことだ。そうすることで、自分の物語を書き直せるようになる。

カフカは少女に、人形が旅をしている物語を書いて読ませた。それは人形がいなくなったことの言い訳でもあったが、それ以上に、物語を読むということが少女を少しずつ救っていったはずだ。そして、ある程度の時間をかけて、ついに人形が戻ってこないという結末を書く。そのとき少女は、自分の世界を、人形がない世界として、新たに書き直すことができるようになっていたのだ。

これこそが肝心なことではないかと思う。

ドーラはこう語っている。

フランツは、③ ひとりの子供の小さな葛藤を芸術の技法によって解決したのだった——彼が世界

に秩序ちつじょをもたらすために、みずから用いたもつとも有効な手段によって。

前掲『回想のなかのカフカ』

失えないものを失って混乱してしまった世界に秩序をもたらす、それこそが文学の力だと思う。
私もじつは、この少女とまったく同じように、カフカの文学に助けられた。だから、このエピソードには思い入れが深い。

二十歳はたちで突然とつぜん、難病になったとき、私は「健康」や「普通ふつう」という、人生で失うことができないものを失ってしまった。私の世界は大混乱し、どう生きていいかわからなかった。こんなのは自分の人生ではない、こんな人生はいやだ、こんな現実はとても受け入れられない、というふうにしか思えなかった。

そんなときに、カフカの文学を読んだ。おかげでずいぶん救われた。とても感謝している。少女も同じだったのではないかと思う。

だから、最後に人形を渡すというのでは、だいなしだと思ふのだ。それだと、私で言えば、 D ことになる。

失ったものを戻してもらえれば、それがいちばんの解決なのはもちろんだが、現実には、失ったものは、もう戻ってこないこともある。そのときどうしたらいいのかということこそ、大問題なのだ。

だからこそ、カフカは残された貴重な時間にもかかわらず、少女のために手紙を、物語を書いたのではないだろうか。

あとで人形を戻すのだったら、手紙はたんに、もとの人形と少しちがっていることの言い訳にすぎなくなってしまう。▲

④ どうして話がこんなふうにならなくなってしまったのか？

私は人の口から口への変化を信じている。先の池大雅の場合のように、事実とはちがってしまったのも、より真実を伝えるものになっていくものだ。

それなのに、このカフカのエピソードの場合は、どうしてこんなことに？
じつは、理由がある。

これは人から人に伝わるうちにだんだん変化したわけではないのだ。

ドーラからこのエピソードを聞いた、カフカの親友のマックス・ブロートが、まちがって本に書いたのだ。

それは『フランツ・カフカの作品における絶望と救済』という本で、邦訳は出ていないのだが、幸いなことに、先の『回想のなかのカフカ 三十七人の証言』に一部が収録されていて、そこに人形の話が出ています。ブロートはこう書いています。

しめくくりには彼は（中略）子供に人形をひとつ残してゆくことを、そしてそれが古くなくなった人形なのだを証明することを、忘れなかった。人形は遠い国々でのあらゆる体験を経ているうちに、多少の変貌へんぼうをとげたにすぎないということにしたのである。

まさに、今、一般的に広まっている話そのものだ。みんなは、プロットの話を実に伝えていたにすぎないのだ。

カフカのことは、みんな、プロットを通じて知った。だから、親亀こけたら皆こけるで、みんながまちがえるのも無理はない。

プロットは、私はとても素晴らしい人だと思っている。非難する人も多いが、私はちがう。「マックス・プロット礼賛」という文章も書いたことがあるくらいだ（『草獅子』<0>」特集カフカ、双子のライオン堂出版部）。

しかし、プロットは思い込みが激しく、勘違いが多い。

（中略）

プロットはこの人形のエピソードを「ドーラ・ディアマントが話してくれた」と書いている。おそらく、いちばん最初にドーラから話を聞いたのがプロットだったのである。その最初の時点で、もう勘違いしてしまったのだ。

プロットは、いい人なので、その勘違いは許していただくとして、カフカ生誕140年のこの機会に、本当はこういう話だったということを、知っておいていただけると嬉しいなあと思う。

なお、ポール・オースターは小説『ブルックリン・フォーリーズ』（柴田元幸訳、新潮文庫）において、このカフカの人形のエピソードを紹介しているが、ちゃんと本来の話をしている。最後に別の人形を渡したりしていない。さすがだ。

ねんのため、もう少し書いておくと、「少女はもう人形と会えないことを受け入れました」というのは、人形を失っても平気になったということではない。少女はその後、悲しくてさみしくて、泣いたかもしれない。ずっと忘れられなかったかもしれない。しかし、ともかくも、人形がない現実を生きたいけるようになった。苦しみがらだとしても。

大ゆれにゆれた家が、元通りになったわけではなく、傾いたまま、なんとか住みつづけられるようになったということだ。

私の場合も同じだ。カフカによって救われたというのは、病気でも平気になったとか、いわゆる「病気を受け入れる」ということができたわけでも、まして「病気になってよかった」と思えるようになったわけでもない。今でも、病気は受け入れられないし、こんな人生はいやだし、嘆きつづけている。しかし、ともかくも、生きている。^⑤立ち直ってはいないが、倒れたままで生きている。

そのことで、ずっとカフカに感謝している。

だからこそ、私はこの少女への手紙が読みたくてたまらない。

それは少女が持っていたはずで、きつと捨てたりはしなかっただろう。

もしかすると、どこかの家の屋根裏とかに、箱に入った古い手紙が眠りつづけているかもしれない。ベルリンの新聞が、呼びかけたことがあるが、いまだに見つかっていない。

カフカの唯一の童話だ。いつか、ぜひ読んでみたいものだ。

（頭木弘樹『口の立つやつが勝つてくたさうのか』による）

問一 次の文は、▼ ▲ではさまれた部分のある段落の末尾に置かれます。この文が置かれる箇所を探し、直前の文の最後の五字を答えなさい（句読点は含みません）。

他の子どもが遊んでいるのを見て、自分も遊びを考え出せるようになるように。

問二

A

B

D

に入る言葉としてもっとも適切なものを、次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

A ア 手紙を書くのが大好きなんだよ

イ ちょっと旅行に出ただけなんだよ

ウ 君が泣くときっと悲しむと思うよ

エ 残念だけどもう戻ってこないんだよ

B ア 旅先から家に戻る決心をします

イ 少女のさみしさや悲しみに気づきます

ウ ひどくいたんで壊れてしまいます

エ 遠い国で幸せな結婚をします

D ア 現実を受け入れることができた

イ ようやく世界に秩序がもたらされる

ウ 最後に健康を戻してもらった

エ 自分自身の人生を否定し続ける

問三

——線部①「事実よりも、変化した話のほうが、より真実を伝えている」とありますが、どういうことですか。その説明としてもっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

A 描いた絵が家から外に出せなくなったという事実は、池大雅の無計画さによる失敗談にすぎないが、変化した話からは作品を失った彼の芸術家としての愚かさを感じられるということ。

イ 描いた絵が大きかったので天井を破って外に出したという事実は、池大雅の画風の壮大さを感じさせるが、変化した話からは彼の豪快な人間性をも読み取ることができるということ。

ウ 描いた絵が家から外に出せなくなったという事実は、池大雅が絵描きであったという確かな情報伝えているが、変化した話は根柢に乏しくて彼の個性に現実味がないということ。

エ 描いた絵が大きかったので天井を破って外に出したという事実は、池大雅の画風や能力などとは関係ないが、変化した話は彼の人並み外れた画才を生き生きと伝えているということ。

問四

C

い。にもっとも適切なひらがな三字を入れ、解答欄の形に合わせて慣用句を完成させなさい。

問五

——線部②「これは決定的なちがいだ」とありますが、どういうことですか。その説明としてもっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 広く伝わっている有名なエピソードは、元の事実よりも面白くなりがちだが、カフカのエピソードでは逆に元の事実の方がはるかに面白いという点で極めて特殊であるということ。

イ 広く伝わっている有名なエピソードは、代わりに人形を与えられることで少女が納得したことになっているが、実は少女は元の人形との大きな違いに気づいていたということ。

ウ 広く伝わっている有名なエピソードは、新しい人形で少女の悲しみが解消されたように見えるが、人形と会えないことを受け入れる元の事実の方がむしろ救いになっているということ。

エ 広く伝わっている有名なエピソードは、人形を取り戻す喜びを描いているが、人形との別れの悲しみに終始する元の事実の方が魅力的であるということ。

問六

——線部③「ひとりの子供の小さな葛藤を芸術の技法によって解決した」とありますが、どういうことですか。四十字以上五十字以内で説明しなさい（句読点、記号も一字に数えます）。

問七

——線部④「どうして話がこんなふうに変わってしまったのか？」とありますが、カフカのエピソードが伝わる過程に関する筆者の説明としてもっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア カフカに関するエピソードが誤った形で広まったのは、親友のプロットが初めてそのエピソードを書籍化した後、多くの人に読みつがれるうちに誤解が生じたことが原因なので、プロットに責任があるわけではない。

イ カフカに関するエピソードは、親友のプロットがカフカの恋人のドーラから聞き取りをした際に勘違いをした内容がそのまま書籍化されてしまい、それを信じた多くの人によって忠実に語り伝えられたため、誤った内容が広まってしまった。

ウ カフカに関するエピソードについて最初に勘違いをしたのは恋人のドーラで、彼女から話を聞いた親友のプロットが誤った内容を書籍化し、それを読んだ多くの人がプロットの言説を信じってしまったため、誤った内容が結果的に広く語り伝えられてしまった。

エ カフカに関するエピソードを紹介する際に、ポール・オースターは、カフカの親友のプロットとは違って内容を勘違いすることもなく、少女に人形が渡されるという事実に基づく話を、正しい内容のまま忠実に語り伝えることに成功した。

問八

——線部⑤「立ち直ってはいませんが、倒れたままで生きている」とありますが、筆者はこれに
関連して、別の部分で次のように述べています。

もうひとりの自分といっしょに歩いている人は、きっと多いだろう。

私は二十歳のときからだ。

二十歳で難病になったときから、「難病にならなかった場合の自分」という、もうひとりの自
分の姿を思い描くようになった。

別の人生の道を歩いていく、もうひとりの自分の背中が見える。

その自分は、いったいどんな人生を歩いているのか。少なくとも、今の自分よりは幸せで、そ
の幸せに気づかないくらい無邪気だっただろう。

こういう思いにとられるのは、なにも病氣の人に限らないだろう。

就職で好きな仕事に就けず、気にそまない仕事をするしかなくなれば、「好きな仕事をしてい
る自分」の姿がどうしてもちらちら見えるだろう。

一生をともしたかった相手と別れることになれば、「その人と暮らしつづけている自分」を
思い描いてしまうだろう。

起きてほしくないことが起きてしまった人は、「何事も起きなかった自分」をうらやんでしま
う。

ただ、最近、ふと思う。

もう難病になってから、20年以上、生きてきた。元気だった二十歳までと同じくらいの期間、
病人として暮らしてきたのだ。

もし今、医学の進歩によって、画期的な新薬が登場して、自分の病氣が完治したとしたら、ど
うだろう？

もちろん、大喜びするだろう。感激し、感動し、感涙にむせぶだろう。それはまちがいない。

しかし、病氣だった自分をあっさり切り捨てて、もとの明るい自分に戻れるだろうか。

きっと、だんだんに戻っていくだろう。しかし、もはや、病氣だった自分を完全に忘れ去るこ
とはできないだろう。

今、「病氣にならなかつた自分」といっしょに歩いているように、今度は「病氣のままの自分」
といっしょに人生を歩いていくことになるだろう。

病氣の自分は、大嫌いな自分だ。病氣をして性格が歪み、卑屈になり、やりたいこともやれ
ず、身体はやせ細り、何をするにも不便で、痛みもやってくる。そんな自分は切り捨てたいし、
そこにためらいはない。

しかし、それでもやっぱり、その自分を完全にふり払うことはできないだろう。その自分の姿
を思い描いて、涙を流すだろう。嫌いだし憎んでいるが、なかつたことにはできない。忘れてし
まうことはできない。嫌いで憎んでいる家族のように。

この文章をふまえると、「立ち直ってはいないが、倒れたままで生きている」とはどのような状況ですか。その説明としてもっとも適切なものを、次のア、イ、エの中から一つを選び、記号で答えなさい。

ア 苦しい状況から逃れたいと願う他の多くの人々と同様に、「病気にならなかった自分」の姿を想像することで自分自身を勇気づけて気持ちやなぐさめ、「病気のままの自分」といっしょに歩いていけるような前向きな姿勢を大切にしようとする努力している状況。

イ 長い間ともに生きてきた「病気のままの自分」を切り捨てることができているが、それまで自分が抱えてきた苦しみとは無縁の「病気にならなかった自分」の姿がどうしてもちらついてしまい、対立する二つの自分の姿の間で板挟みになっている状況。

ウ 自分の置かれた苦しい状況を憎み、排除したいと願いながら、「病気にならなかった自分」の姿を想像してうらやんでしまう一方で、長い間生きてきた「病気のままの自分」の姿を完全に切り捨てることはできず、二つの自分の姿をとらえて生きている状況。

エ 長い間「病気にならなかった自分」の姿を想像して生きてきたが、自分の置かれた苦しい状況を根本的に解決してくれないという点では「病気のままの自分」と本質的には同じだということに気づき、共通点を持つ二つの自分の姿を強く憎み、排除したいと願っている状況。

(以下余白)

